

カズの書道講座 (九)

今回は、山梨県内の書を考えてもらいたいという思いもあり、展覧会の作品を取り上げて批評しましたが、本筋に戻して進めたいと思います。その前に前項までの実技編を簡単にまとめてみましょう。

文字には字形があり、とくに楷書はその字形を大切にすること。行草の場合は、デフォルメを考えるとということ。よい作品は、小さい文字でも大きく見える。大きく見せるためには、ふところを広くすること。線の方向を考えること。ということをし上げました。

対比のバランス

シンメトリーというような左右相称的なものではなく、相反する対比した要素を取り入れて、バランスを考えるとということです。およそ世の中は対比の世界とは言えないでしょうか。光と影、男と女、東と西：無限です。漢詩には対句があり、スポーツでも静と動の変化があり、音楽も強弱・高低・遅速他

絵画では遠近法があり対応色もあり、ありとあらゆるものが対比して成り立っています。

書は紙の白と墨の黒はもちろんのこと、文字の大小・細太・長短・緩急・潤渇・疎密・強弱・曲直・遠近・連綿と単体・静と動等など様々な対比が考えられ、それらの要素の組み合わせが感興を呼び、魅力ある作品として生まれて来ますので、例を挙げて考えてみましょう。

例①大小から考える

① 碧の上部を大きく下部を小さく、空は上部を小さく下部を大きくしました。こうしますと絵画の遠近法に近づき、紙の中心から外に広がって行く感じが出て来ます。

② 碧の上部を小さく下部を大きく、空は上部を大きく下部を小さくしました。①を逆にした例です。

二例とも大から小へ、小から大へという流れが発生します。流れるということは動きが出るということです。動くということは生きているということです。よく「枯れた作品ですね」と円熟した意味でほめ言葉として使いますが、枯れたものが良いとは思えません。生きている方が良いに決まっ

ています。

③ 上部を大きくして、下部に向って段々小さくしました。下部の余白が空を引き締めて、宙に昇って行くような感じとなり、作品が大きく見えます。

④ 上部を小さくして、下部に向って段々大きくしました。どっしりとした安定感がありますが、下が詰まって息苦しい感じもします。

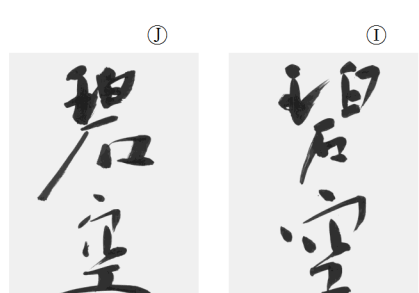
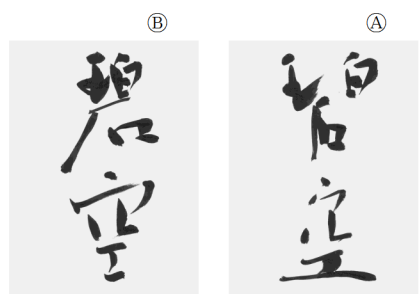
⑤ 石の部分だけ大きくしました。大きくするため、口と斜線の間を広く取ったため、表情が豊かになりました。

⑥ カンムリ（空はウカンムリではなくアナカンムリ）だけ大きくしました。カンムリの下に空間が出来たため、ゆったりとした感じがあります。

⑦ 碧を大きく空を小さくしました。碧と空の間に空間があれば良いのですが、少ないと空は上の文字に押しつぶされたような感じとなります。

⑧ 碧を小さく空を大きくしました。下が大きくて上が小さいと、上の文字は下の文字にはじき飛ばされたような感じとなります。

⑨ 碧・空ともに上部を大きく下部を小さくしました。一見バランスよく見えますが、ともに同形となり変化に乏しく、また表情が同じで面白くありません。



⑩ 碧・空ともに上部を小さく下部を大きくしました。①と逆にした例です。下が大きいと安定して見えます。が、やはり変化に不足してしまします。